

学 位 論 文 要 旨

東日本大震災後の復興教育に関する研究-津波被災地の復興に向けた実践を事例に-
Education for reconstruction after the Great East Japan Earthquake
A case study of reconstruction efforts in tsunami-affected areas

農林共生社会科学専攻農林共生社会科学大講座
石山雄貴

東日本大震災の津波災害を受けた三陸沿岸部は復興過程で様々な問題が発生している。災害の規模の大きさを規定する被災前の社会が持つ脆弱性として、グローバリゼーションを背景とした東京や一部の大企業と三陸沿岸部といった農山漁村地域との「中心-周辺」関係があり、「創造的復興」はその関係性をより強固にしていく復興のあり方である。被災地の持続可能性を確保していくためには、震災からの復興を契機にこの関係性を問い直していく必要がある。また、被災地の持つこの課題は、全国の農山漁村で共通する課題でもあり、被災地はその課題が最も精鋭化した地域である。本論文では、被災者主体の復興に向けた実践から東日本大震災における「創造的復興」に対抗していく復興教育のあり方を明らかにするで、グローバリゼーションの進展による矛盾に向き合う新しい教育を提起することを目的とする。

第1章では、現在国・県主導で行われ、被災前からの新自由主義的政策を再稼働させていく「創造的復興」に対抗する「内発的復興」に必要な要素として、被災前からの課題を被災者主体で乗り越えていく復興、被災地・被災者の文脈に基づいた復興、被災後の生活の切実さに寄り添っていく復興という3つの復興を提示した。

第2章では、仮設商店街の設立過程を被災地直後の避難所運営から復興ビジョンづくりまで総体的に捉え、特に学習活動に焦点を当て「内発的復興」過程を明らかにすることを目的とし、宮城県気仙沼市南町での柏崎青年会を主体とした気仙沼復興商店街南町紫市場設立の取組みに着目した。南町商店街は被災前からシャッター通り化が進んでおり、津波によってそのそのほとんどが全壊していた。

仮設商店街設立に向けた実践は、その実践の内容により、避難所運営の実践、南町復興商店街設立の計画策定の実践、復興ビジョン作成の実践という3つの実践に分けるこ

とができる。これらの実践の変容過程から「内発的復興」の過程には、課題の発見と解決策の探求、被災前の地域の状況乗り越えていく方向性、避難所運営から仮設商店街設立に向けた実践を通して地域全体の復興に向き合う実践への展開という3つの特徴が認められた。さらに、その実践を経て、被災者主体の避難所運営が「内発的復興」の原動力としての機能を持ち、仮設商店街設立が、地域経済循環の拠点づくりだけでなく、「内発的復興」の拠点としての意義を持つことが明らかになった。

第3章では、被災した教師が、被災者主体の復興に参加していくことを通して被災体験と復興を教材化していくために必要な観点について明らかにすることを目的とした。宮城県石巻市雄勝地区での徳水博志の実践やライフ・ヒストリーに着目した。

被災した徳水は、学校の対応と保護者のニーズのズレを目の当たりにしたことや児童と被災者との交流を通して、「喪失感と向き合う観点」を獲得した。また、主体的に地域の復興に参加することによって「復興の担い手としての観点」を獲得した。さらに、被災によって喪失したものの対象化を通して「被災した児童・保護者に寄り添う観点」を得ていった。その三つの観点が、徳水が行う学校教育実践に影響を与え、「震災復興教育を中心とした学校経営案」の提出や地域の復興と向き合う教育実践、児童たちの被災体験と向き合うケアの教育実践へつながっていったことが明らかになった。これらの徳水の被災直後からのライフ・ヒストリーによって、教育者が、復興に向けた活動へ参加し、被災者に向き合うことによって、地域に根ざし、復興に向けた教育実践を自ら模索し、実践していく役割を持つことが明らかになった。

これらの事例について、「内発的復興」のもつ3つの復興の要素から整理すると、「被災後の生活の切実さに寄り添っていく視点」を持つ実践を原動力として、「被災前からの課題を被災者主体で乗り越えていく視点」と「被災地・被災者の文脈に基づく視点」を獲得していく実践を両輪として展開していく構造をもつ復興教育のあり方が明らかになった。

さらこの復興教育の実践は、失った関係性を再構築させることを通して、被災地となった地域での暮らしを再開させるための知を自ら獲得する過程であり、復興という地域の再生を担う主体形成のための実践であった。そこで再構築が目指された被災地と被災者との関係性は、被災により失われた地域における関係性ではあるが、被災前からのグローバル化の推進による矛盾のなかで、住民が徐々に失いつつあった地域との関係性でもあった。したがって、本論文で示した復興教育は、内発的復興を支えることを通して、グローバル化の時代に本格的に突入したなかで住民が失いつつあった関係性と向き合い、その関係性を取り戻していく教育であったと考えられる。